

讃岐が初めて生んだ総理大臣

片岡勝太郎

亡父政吉の代から知遇を得ていた関係から、アルプス電気(株)昭和二十三年創業以来、公私にわたり先生には大変お世話になった。政界の大立者というより郷土の大先輩として、私は私なりの考え方に立って蔭ながらの声援を送ってきた一人である。

讃岐という国は小さな県ではあるけれども、海の幸山の幸に恵まれているばかりでなく、教育程度も全国平均を上回る平穩無事な国である。従って常識的な小粒の人物が多いように思われる。明治以来一度も総理大臣を出したことがないのはこのせいだったかも知れない。自民党の党則による総裁選挙に先生が立候補せられた時、全県を挙げての熱狂が生まれたのは、総理の卓越せる識見と高邁な人格がもたらしたものであることは勿論であるが、讃岐の殻を破りたかつた願望であつたかも知れない。私も勿論その一人であつただけに、総裁選の勝利、そして総理大臣就任はわがことのように嬉しかった。

池田首相が亡くなられたあと、先生が宏池会を引き継がれて間もなく、私は赤坂の宏池会事務所に先生を訪ねたことがある。その時の面影が未だに忘れられない。それまでの先生はどちらかといえば温顔でヌーボータイプであり、特に眼は細く穏やかであつた。ところがその日は眼光炯炯として人を射るが如き眼差しであつた。先生やる気だなと密かに思ったものである。

昭和五十三年十一月一日、それは先生が総裁選挙に立候補された日であり、当社の創立三十周年の記念パーテ

イー（パレスホテル）のあった日でもある。その忙しいなかを私どものために先生は万障繰り合わせてご臨席くださった。その時のお祝辞の第一声は「私がアーウーの大平です」だった。この一言で八百名を超す来賓の方々がドツと沸いた。それは議会答弁しか知らない人達にとって思いがけない呼びかけだったからである。

忙しいなかを約一時間過ごされ、たくさんの人にご挨拶された。総裁選の大平票が増えたと私は今も確信しているし、座談やテールスピーチが抜群にお上手だった大平像の側面が躍如としており、それが突然未知の人達の前に現出したという意外性が、今も友人の間で語られている。

私のところには香川県人が多い。総裁選に彼等がチームを編成して自民党员と覚しき人のところへ戸別訪問に出掛けた。時には競争相手の秘書のところへ飛び込んでトツチメられるというエピソードを交えながら、これは大いに効果を挙げた。大部分の訪問先の方々が香川県人の熾烈な熱意に暖かい声をかけてくれた。

総裁選に大平が金を使ったと非難する人々がいたが、そうではない。県民の盛り上がる熱意があつたということを知らないだけである。お礼に菰樽酒をもらった。二十数人の臨時運動員が祝盃をあげ先生の前途を祝った。

昭和五十三年十一月二十七日午後六時、私は総裁選勝利のテレタイプをロンドンのチャールホテルで受け取った。滲み出るような喜びを感じた。昭和五十五年六月十二日午後六時、先生の思いがけない急逝のテレタイプを同じホテルで受け取った。力が抜けてゆくのを感ずるとともに、同じホテルで悲喜の奇遇をどう解釈すべきか、私は一生このことを忘れないだろう。

日本の政治史のなかにおける先生の評価はもつと歳月を経てからだろうが、醜聞のなかつた大平先生に「大平哲学」を実行できる時間が欲しかった。梃子でも動かなかったあの解散時の「信念」を生かすのはこれからだという時だっただけに無念、残念である。合掌。

（アルプス電気社長）